

2021年1月10日主日礼拝 “成人感謝”

大井バプテスト教会

説教題「沈んで、知る“救い”」マタイ福音書14章22～33節

主任牧師 加藤 誠

「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、『主よ、助けてください』と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』と言われた」(マタイ14章30-31節)。

例年なら今日は成人感謝のお祝いをする礼拝です。今年も大井教会の教会学校に通っていた若者たちに案内をし、何名かから出席の意向を聞いていたのですが、残念ながら顔を合わせての礼拝はできなくなりました。それぞれをお訪ねし、用意していたプレゼントと共に教会の祈りを届けました。彼／彼女らのこれからの人生に伴ってくださる主イエスの恵みを覚えつつ祝福を祈りたいと思います。

さて「成人を迎える」とはどのようなことでしょうか。主イエスの時代のユダヤ教では12歳になった男子は村の会堂の礼拝構成員と認められ(12歳以上の男子が10名で礼拝は成立)、聖書(旧約)朗読などを担当しました。聖書は神の言葉そのものであり一字の読み間違えも許されない非常に緊張する奉仕であり、12歳という年齢をもって「成人としての自覚」が重く求められたのです。

現代の日本では、「成人としての自覚」を促される場面があまりないように思いますが、酒やたばこ以外に「成人の前後で明確に異なる」のが、保護者の承認が不要になることでしょう。契約に際して本人が考えて選び取り、本人が契約責任を負うのです。もう保護者の責任ではなくなる。もちろん相談は大いにしてよいけれど、最終的には本人が選び取っていく。「お父さん／お母さんがこうしなさいと言ったから…」という言い訳は通用しなくなるのです。

その「成人としての責任」を背負っていく一人ひとりに、「イエス・キリストの信仰という『杖』を大切に握りしめて！」と伝えたいと思います。何を自分の仕事とするのか。この場面では、何を大切に選び取るべきなのか。小さな決断から大きな決断まで、人生は日々決断の連続です。その時にイエス・キリストの信仰という「杖」を大切にしていってほしい。ただ、「杖」と言われても今の若者たちにはピンとこないかもしれません。ふだんの生活の中で骨折でもしない限り、杖のお世話になることはないからです。かく言う私も、自分ひとりの力で歩けるのが当たり前、杖に頼らないと歩けない自分の姿をなかなか想像できません。

けれども、人生においては必ず「杖」を必要とする時があるのです。主イエスの時代、人は旅をする時、必ず杖を持って出かけました。昔の旅は野宿が当たり前であり、護身のための杖が必要だったからです。クリスマスページの羊飼いたちはみんな杖を持っていますが、それは羊を守るために野獣と戦う杖でした。それと同じように人生はいろいろな戦いに満ちています。その多くは自分の弱さや欲望との戦いであり、時には理不尽な周囲からの圧力との戦いなどもあることでしょう。その闘いのための杖を私たちは必要とするのであり、皆さんの人生を支えてくれる

最も信頼できる「杖」。それがイエス・キリストというお方です。この方は「道であり、真理であり、命」です。すべての答えがイエス・キリストにあります。皆さんを支え、慰め、導いてくれる力をこの方が与えてくださるのです。だから、ぜひこのイエス・キリストという「杖」、この方を信頼して歩む「信仰の杖」を、しっかりと手に取って行ってほしいのです。

そして、もう一つ付け加えるなら、その「杖」を手にした皆さんは「どんな失敗、挫折をしても大丈夫」ということです。わたしが中学の時、原田先生という野球部の監督で、数学の名物先生が居ました。原田先生の口癖は「間違う先生、良い先生。間違う生徒、良い生徒」というものでした。時々わざと間違えて板書をするのです。

「先生、それ、間違っています」と生徒が指摘すると、ニヤリと笑いながら、「間違う先生、良い先生」とつぶやきます。教師がいつも正解とは限らない。常に自分で考える…ということでしょう。また野球の監督としても「間違えていい、失敗していい。そこから学ぶことがたくさんある」と言われていました。

ペトロというお弟子さんがいます。福音書では主イエスの一番弟子と呼ばれていた人物です。そのペトロの魅力は「たくさん間違える弟子」ということでしょう。たくさん間違えて主イエスにたくさん叱られたペトロ。けれどその分、たくさん主イエスの深い深い愛を知ったペトロでした。今日の聖書の場面（マタイ 14 章）でも、嵐の海でペトロは大失敗をして失態をさらしています。嵐の海を歩かれる主イエスを見て「自分もイエスさまのようにになりたい！」と思ったペトロは「歩かせてください！」と手を挙げるのです。身の程知らずというのか、よく考えていない、短絡的というのか。他の弟子たちが躊躇するようなことをストレートに主イエスにぶつけるのがペトロでした。そして失敗する。当時、嵐の湖はこの世の中に吹き荒れている「魔力」を意味しました。人を惑わせ、誘惑し、神からどんどん離れさせ、混乱と自滅に引きずり込んでいく悪の力。私たちは、この世の中に吹き荒れている「魔力」と戦わなければ神さまに向かって歩くことはできません。唯一それができたのは主イエス、お一人でした。私たちはみんな主イエスのように生きたいと思うけれど、ちょっと主イエスから目を離すと、吹き荒れる風が怖くなって、たちまち嵐の海に沈んでしまうのです。クリスチャンなのに沈むのです。信仰をいただいているはずなのに失敗し、挫折し、取り返しのつかない罪を犯してしまうこともあるのです。クリスチャンとして生きるということは、主イエスのように歩きたいと思うけれど、「歩けない情けない自分を知ること」かもしれません。ペトロもここで大失態をさらしました。が、嵐の海に沈みかけた時、そのペトロの手をしっかりとつかんで「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と叱りながらも、ペトロを湖の上に起きあがらせてくださる主イエスの暖かい手のぬくもりと愛を知らされたのでした。

ですからペトロはこのあと「金銀はわたしにはないが、わたしにあるものをあげよう。主イエスの名によって立ち上がり、歩きなさい」と証しする人になりました。皆さんにもぜひこの「杖」を大切に握りしめて行ってほしいのです。